

第2回X会議 議事要旨（速報）

- 1 日時 令和6年8月21日(水) 15時～17時30分
- 2 場所 AIM（アジア太平洋インポートマート）3階 313 会議室
- 3 出席者 北九州市長 武内和久、副市長 江口哲郎 片山憲一 大庭千賀子、
顧問 上山信一 山本遼太郎(官民連携ディレクター)
参与 高井健司 田中江美
- ほか

4 概要

◇会議の冒頭、市長から、

「今後も持続可能な文化政策にするためには、運営から経営に考え方を換え、質・量両面から経営のあり方を考えていく必要がある」

「昼休みや夕方に寄りたくなる文化施設とはどういうものか、また、文化の力で都市の格を上げていくにはどうしたらいいか、そのような問題意識をもって議論していただきたい」

等の発言があった。

(1) 局区X方針公表

○各局区長等が自己点検を実施し、変革課題の洗い出しと課題解決に向けた取組みを「局区X方針」としてとりまとめ、HPで公表することとした。

○施設老朽化など、趣旨が類似する課題については、横断検討グループの設置等により全庁的に対応を検討していくことを事務局より説明した。

(2) 経営分析の経過報告「文化振興施策」

○文化振興施策クラスターでは、文化施設において、現場レベルでの問題意識を整理し、経営分析の途中経過として報告した。

○討議では以下のような意見があった。

- ・公表できない部分は削除し、それ以外は自治体名など具体的な情報を資料に掲載すべき。
- ・現場が考えた課題だけでなく、経営者目線で本当の課題は何かを考える必要がある。
- ・これだけの数の施設が必要か、あり方を検討すべき。
- ・文化施設と環境系施設で一体的な方向性を考えるべき。
- ・運営体制のあり方を検討し、人事異動の流動性を持たせなければ学芸員が育たない。
- ・これだけの数の施設が直営なのは珍しい、直営維持について行政は説明責任がある。
- ・社会教育施設としての発想から転換が必要。
- ・チケットレス、キャッシュレス、外国人対応など今日的課題に対応していく必要がある。

(3) プラチナ市役所プロジェクトの経過報告

○「働きやすさ」や「働きがい」を実現する観点から、若手職員のグループで市職員の働き方をめぐる課題の洗い出しを行い、その状況を報告した。

○討議では以下のような意見があった。

- ・発表の元となった個々の具体的な課題について、しっかり解決を働きかけることが重要。
- ・課題の解決には、数ある問題から何が「重点課題」なのか見極めることが必要。
- ・制度所管局に声を届ける機会がなかったため、今回のプロジェクトをチャンスと捉えて取り組んできた。重点課題は意識して説明したい。

(4) 経営分析の経過報告「公共投資」

○北九州市の公共投資の特徴や課題等について、経営分析の経過報告を行った。

○討議では以下のような意見があった。

- ・市の競争力を高めるための投資は必要。それを行うためには今ある施設をどう取り扱うかという視点が求められる。

(5) 「文化施設」における市政変革の取組

○「文化振興施策」の経営分析に関連し、漫画ミュージアムにおける現場改善の取組について報告を行った。

○討議では以下のような意見があった。

- ・生の声が聴けるヒアリングを実施したことは非常によい取組みである。
- ・ヒアリングで把握できた性別、年齢、居住地などの属性をさらに分析していくことで、今後のターゲットも見えてくるのではないかと。
- ・単なる満足度ではなく、「この料金を払って不満はないか」「満足であれば料金はいくらまで払う気はあるか」という問いかけが重要。

(6) 事業クラスター編成の見直し

○事務局から、公共施設マネジメントや公民連携など全庁的に進めるべき課題に対応するため、横断検討グループの設置など事業クラスターの見直しを行うことを報告した。

(7) 副本部長講評

○最後に、副本部長である3名の副市長から以下の講評があった。

- ・今あるものが前提となっていないか、分析を高める必要がある。担当局長は経営者として組織の見解をしっかりと持ち議論すべき。
- ・公共施設は、5市合併後の基盤整備など、その時々でのミッションで整備されてきた。情勢が変わって各施設がどういうポジションを果たすのか、ここにX会議で議論する意味がある。
- ・X会議という仕組みがなくなっても取組みが持続するためには、なぜこれまで本質的な議論ができていなかったのか、その要因を問い直すことも必要。

5 問い合わせ先 市政変革推進室
電話番号 093-582-3170